

# 1960年代のアメリカ合衆国の若者文化と カナダ文芸ナショナリズムの接点

—ハウス・オブ・アナンシ・プレスを中心に—

荒木陽子

はじめに

本稿は1960年代を席卷したカナダ・ナショナリズムに関連する各種運動の中でも、特に1960年代後半から1970年代前半に最盛期を迎えるカナダ文芸ナショナリズム (Canadian Literary Nationalism) の性質を考察し、同運動とベトナム戦争反戦運動を中心とするアメリカ合衆国のカウンターカルチャー運動の橋渡しを試みる試論である。二つの運動の接点を、当時カナダ文芸ナショナリズムを牽引した若者主導の小規模出版社の活動に焦点をあてることにより前景化してゆきたい。

## I. 1960年代：ベトナム戦争とアメリカ、カナダ

1963年のケネディ (John F. Kennedy) 大統領暗殺後、リンドン・ジョンソン (Lyndon B. Johnson) が第36代アメリカ合衆国大統領となった。保守派ジョンソンの政権はケネディの冷戦主義から路線変更し、トンキン湾事件 (1964)、北爆の開始 (1965) と、ベトナム戦争へ積極的に介入した。<sup>(1)</sup> 時を同じくして、1963年カナダはレスター・ピアソン (Lester B. Pearson) が、前任者ジョン・ディフェンベーカー (John G. Diefenbaker) から首相の座を引き継ぐ。ピアソンは感情的な反米主義政策で米加関係を冷却化した前任者ほどではないが、その発言の要所でアメリカ合衆国を含む帝国主義勢力を批判した。<sup>(2)</sup> カナダが史上はじめて合衆国の主導する国連軍に参加した朝鮮戦争勃発時 (1950)、外相であったピアソンは、国連は「ある特定の国の道具になるべきではない」と述べ、合衆国主導の軍事行動に全面的に賛成しないことを示唆した。<sup>(3)</sup> 続くスエズ危機 (1956) に際し、ピアソンは国連総会にて議長経験者、そしてカナダ外相として「我々は戦闘を終わらせるためのみならず、平和を築くためにも行動を取ることが必要である」と述べ、カナダ史上初めて旧宗主国イギリスと戦うことを拒否した。<sup>(4)</sup> ピアソンは、英・仏・イスラエル連合軍に停戦通告をしたアメリカの主導のもと国連が平和維持軍 (当時の国連緊急軍) を派遣することを提案、実行し、1957年ノーベル平和賞を受賞する。こうして、カナダはミドル・パワーとして台頭していく。このピアソンがジョンソン政権

のベトナム戦争への積極的介入を無視することはなかった。1965年テンプル大学世界平和賞 (Temple University World Peace Award) を受賞した際に、ピアソンは次のようにアメリカの軍事方針を批判する。

私が熟考する立場にない要因は沢山ある。しかし、軍事的圧力の直接的結果にみえなくとも、適切なタイミングで北ベトナムへの空爆を一時停止する事は、ハノイの政権に、もし彼らがそう解釈したいと願うのなら、彼らの方針にある柔軟性を取り入れる機会を与えることになるかもしれないという、最小に見積もっても可能性が、実に存在しているように思われる。<sup>(5)</sup>

隣国首相のこの発言を受けジョンソンは激昂したとされる。ピアソンの反ベトナム戦争、反帝国主義は、当時のカナダ国内の世論と大きくかけ離れてはいない。

## II. マッシー報告書 (1951) にみるアメリカからの文化的影響への国家的危機感

カナダ国民にとって1960年代はベトナム戦争の時代であると同時に、ナショナリズムの時代でもあった。1967年、カナダは連邦結成100周年をむかえた。当時カナダにおいては、国を挙げての祝賀ムードのなかで、カナダのアイデンティティを模索する動きが頂点にあったが、そこにカナダ独自の文学の発達は大きな意味を持った。<sup>(6)</sup> 第二章、第三章では、第二次世界大戦後1967年に至るまでのカナダの文芸ナショナリズムの勃興過程を概観する。

1947年カナダ市民権が確立すると、文化・芸術を通して国民の愛国心を高めるため、首相ルイ・サン・ローラン (Louis St. Laurent) は、カナダ文化の現状を調査し保護育成することを目指し、1949年カナダ文芸科学の発展に関する調査委員会 (Royal Commission on National Development in Arts, Letters and Sciences) を組織し、ヴィンセント・マッシー (Vincent Massey) を委員長に任命した。興味深いことに、カナダの国民文化を調査した委員は、全員国外で教育を受けている。<sup>(7)</sup> 1951年、同委員会はその報告書を提出した。この通称マッシー報告書は、カナダ文芸科学の育成において最大の問題を、アメリカからの大衆文化の流入と、芸術家、学者のアメリカへの流出であると位置付け、現状打開のために国内の文芸科学の保護、育成が必要であると勧告した。結果として、カナダはその文化保護主義政策を推し進める。この勧告の重要な産物としては、本稿のテーマとの関連においては、その後のカナダ文芸ナショナリズム運動を国内の作家、出版社への助成金の支給や、カナダ総督賞 (Governor General's Award) など様々な文学賞への関与というかたちで援助してゆくカナダ・カウンシル (Canada Council for Arts) が挙げられる。

### Ⅲ. カナダ・カウンシルとカナダ文学の出版業

#### 1. 大手出版社によるカナダ文学キャンノンづくり

カナダ・カウンシルはカナダ文学の形成を目指し、作家のみならずカナダ文学をサポートする出版社を保護した。特に、カナダ出版業界大手のマクレランド・アンド・スチュワート社 (McClelland and Stewart) は、1957年、カウンシルのサポートをもとに、ナショナルリスト文芸批評家のマルコム・ロス (Malcolm Ross) を中心に、ニュー・カナディアン・ライブラリー・シリーズ (New Canadian Library Series、以下NCL) を立ち上げた。ロスを中心にシリーズ編集者は、彼らが「重要」と考えたカナダ文学の旧作をペーパーバック判で再版し、国内の教育現場に供給することにより、カナダ文学界にキャンノンを作り出すことになる。<sup>(9)</sup>

NCLが廉価版にこだわったという事実は、当時の学校教育におけるカナダ文学の取り扱いと深く関係する。カナダ国内のアングロフォン学習者を対象とした教育において、「国語」にあたる教科は「英語」であるが、1960年代までその教材には、イギリス、アメリカの文学を使用することが主流であった。<sup>(10)</sup> ロバート・レッカー (Robert Lecker) らによれば、その理由のひとつは、カナダ文学が中等教育機関はもとより教員を育成する大学、特に大学院であまり教えられていなかったことであるという。この状況はカナダ国内におけるカナダ文学の地位の低さと共に、授業の教材となるカナダ文学のテキストが発行部数の少なさや絶版のために入手困難であったことにも起因した。従って、カナダ文学のテキストの供給面を改革した、同シリーズはつづく1960年代のカナダ文芸ナショナリズムの牽引力となった。

#### 2. カナダ文学の新人を紹介する小規模出版社の台頭

カナダ・カウンシルは、カナダ文学の育成のために、実績のある出版社のみならず、その方針に沿う新興小規模出版社も保護した。カウンシルからの援助をうけ、利益が上がりにくい国内の作品、特に新人の処女作を紹介することに熱意を注いだ小規模出版社は、1960年代半ばから70年代初頭へと続くカナダ文学ブームの形成に大きな影響を与えた。新興の小規模出版社の多くは、若い作家が自身の、またはその仲間の作品を同国民に紹介すべく、1960年代に創設した出版社であった。その活況をもって、ジョン・ボール (John Ball) とジェニファー・アンドリュース (Jennifer Andrews) は、1967年を「現代カナダ出版業界の始まり」と考える。<sup>(11)</sup> 同年、連邦結成百周年を記念し『カナダ文学』 (*Canadian Literature*) は、「カナダの出版」を特集した。その編集記において同誌編集者にして批評家のジョージ・ウッドコック (George Woodcock) が、小規模出版社の台頭について特筆したことからも、カナダ文学の出版にとって1967年が非常に重要な年

であったことが察せられる。この「カナダの出版」号において、詩人アール・バーニー (Earl Birney) は、「この国が小さなアメリカの衛星であるかぎり、我々の文化的未来は無いに等しい」と危惧するが、当時カナダ文学作品の出版に取り組んだ小規模出版社の多くは、バーニー同様にマッシー報告書に明確にしめされた、アメリカの文化帝国主義からカナダ文化の独立を守るという政治的目標を共有していた。<sup>(12)</sup>

さらにウッドコックは、「カナダの出版」号をフォローし、ブーム末期の1973年に「カナダ産作品を出版する」と題を打った『カナダ文学』を出版する。ここでウッドコックが、若者主導の新興小規模出版社や小雑誌などが牽引したカナダ文学運動を総括し、1960年代にアメリカ合衆国を震源に若者が中心となり1950年代風の価値観の再考を迫った対抗文化運動を意識し、その運動を「対抗文化的出版」(counter-cultural publication)と表現した事は的確であったといえよう。<sup>(13)</sup>

#### IV. ハウス・オブ・アナンシ・プレス、トロント若者文化、そしてアメリカ

##### 1. ハウス・オブ・アナンシ・プレス：若い編集者と作家たち

1960年代に営業を始めた小規模出版社は、コーチ・ハウス・プレス (Coach House Press)、タロン・ブックス (Talonbooks) など数多いが、本稿は先に言及したカナダ・カウンシルのカナダ文学出版助成金を小規模出版社として最初に受け、<sup>(14)</sup> その現代カナダ文学における重要性が特に高いハウス・オブ・アナンシ・プレス (House of Anansi Press、以下アナンシ) を取り上げる。<sup>(15)</sup> アナンシは、1967年当時トロント大学にて教壇に立っていた詩人デニス・リー (Dennis Lee) と、小説家デイヴ・ゴッドフリー (Dave Godfrey) によって設立された。その活動の最初の拠点は、ゴッドフリーが大学から借り受けたスパディナ通り (Spadina Ave.) の教員用住宅の地下であった。1969年にゴッドフリーらとともに、ニュー・プレス (new press) を立ち上げ、後にカナダ・カウンシルの出版部門担当者として、またマッシー報告書 (1951) に続きカナダ文芸科学の状況を調査したアップルバウム-エベール報告書 (Applebaum-Hébert Report、1980年) の作成においては、カナダ文学担当アドバイザーとしても参加した編集者、作家ロイ・マクスキミング (Roy MacSkimming) は、同プレスの社史を語る上で、当時のアナンシを次のように表現する。

アナンシは単なる文芸出版社ではない。アナンシは、ある文化的アジェンダ、世代的な指令、そして国民的使命を負っていた。アナンシは、現代カナダ文学創造の研究・開発を行った、あの国家規模の小規模出版社の運動を巻き起こしたのである。<sup>(16)</sup>

リーとゴッドフリーが、文学者であり社会・文化活動家であったことは、ウエスト・ヴァージニア州出身の反米主義作家、批評家のダグラス・フェザーリング (Douglas Fetherling) の『トラベルズ・バイ・ナイト』 (*Travels by Night*) にも詳しい。

では、アナンシはどのような文化的、政治的、世代的な特徴をもち、その思想を行動に移していったのか。当時20代後半であった創設者の二人は、カナダのエリート学生の慣例に従い国外で教育を受けた。1960年代半ばにリーはオックスフォード大学、ゴッドフリーはアイオワ大学に学んだ後にカナダに帰国し、トロント大学で英文学を教授することとなる。このとき二人は、国内最大のトロント大学でさえ、カナダ文学のコースが稀有、書店に並ぶカナダ産書籍は5%以下という母国の文学状況の不毛さを実感する。<sup>(17)</sup> この時点までに、ゴッドフリーはアメリカでの学生時代の経験、そしてその後のガーナにおけるカナダ大学海外奉仕 (Canadian University Service Overseas) のヴォランティア活動に参加した経験を通して、反帝国主義者、反米主義者となっていた。また、ゴッドフリーより先にトロント大学で教鞭をとっていたリーは、母国の「文化的、政治的に植民地化された状況」を憂いており、<sup>(18)</sup> その思いを処女詩集『キングダム・オブ・アブセンス』 (*Kingdom of Absence*) に述べる。<sup>(19)</sup> そして、その原稿を読み感銘を受けたゴッドフリーは、国内の新人発掘に消極的なトロントの出版社に出版を打診する時間を省き、自ら出版社を作り詩集を出版することを提案し、1967年春それを実行する。

アナンシは既に述べた二人の思想を背景に、反帝国主義的かつカナダ主義的な活動を行なう。マクスキミングは、当時のゴッドフリーとリーのねらいを「カナダという国にカナダというものを見つめることを可能にすること、同国人がすばらしい作品を作り上げた時、カナダ人に注目させること」と要約する。<sup>(20)</sup> また、スティーブ・ケイン (Stephen Cain) は、「アナンシの出版物とナショナリズム、もしくはナショナル・アイデンティティへの関心と分離して考えることは困難である」と指摘する。<sup>(21)</sup> 当初ゴッドフリーは、自らが立ち上げた出版社のアジェンダを「ナショナリズム」と明言することをためらっていた。しかしゴッドフリーのその他発言を考慮すると、彼の躊躇は当時アメリカ合衆国で起こっていた「国民の日々の生活と関係のないところで発達したイデオロギーが、様々な国家の道具を使って国民を先導するようなナショナリズム」、または世界中にある特定の型をおしつける「経済的ナショナリズム」との混同を避けるためであろう。<sup>(22)</sup> ゴッドフリーの懸念の一方で、リーは『トロント・テレグラフ』紙上のインタビューにおいて、二人が「都市型ナショナリスト」であると宣言している。<sup>(23)</sup>

前述のとおり、1960年代に出発したカナダの小規模出版社の多くは、カナダ国内の若い作家の作品を出版することを通して、自らの世代とカナダに声を与えることを目指していたが、フェザーリングが指摘するとおり、彼らが出版方針の操作をとおして、出版行為を自らの考えを世に伝えるための道具として使っていた点は無視できない。<sup>(24)</sup> アナンシに

においては、編集者の意向が編集者同様主として30歳以下の若い詩人を対象としたヤンガー・ポエッツ・シリーズ (Younger Poets Series)、小説家を対象とするスパイダーライン・エディションズ (Spiderline Editions、以下スパイダーライン) の刊行に実を結ぶ。ヤンガー・ポエッツ・シリーズは2冊のみで途絶えた。しかし、前年から同出版社の出版物の中心となる小説を、1969年に五作品一括して出版したスパイダーラインは、同じカヴァー、同じ活字体を使用し、同時に出版することにより、出版までの時間を縮めるとともに、プレス・リリースの手間を簡略化し、当時カナダでは破格であったペーパーバック版で1ドル95セント、ハードカバー版でも5ドルという低価格を実現し、リーの掲げる「最高の作家の作品を出版し読者を探し、次の作品の出版に繋げることによって、カナダのフィクションの状況を変える」という目的を達成した。<sup>(25)</sup> スパイダーラインは、前年そのタイトルにより米国巨大企業を挑発したゴッドフリーの短編集『死はコカ・コーラと一緒にの方がうまくいく』(*Death Goes Better with Coca-Cola*) に対して、<sup>(26)</sup> 詩人、小説家のオールデン・ノーラン (Alden Nowlan) が評価したアナンシの出版方針—よりよい配給状況と低価格をもって、若い作家の処女作をいち早く出版すること—を現実化したものといえる。<sup>(27)</sup>

スパイダーライン第一弾作家たちが一律に示した類似性は、その背景はイギリス系、フランス系、ユダヤ系、合衆国からの移民者と様々であったが、いずれもオンタリオまたはケベックに住む31歳以下の左翼的思想を持つ白人男性であり、小説形式上は因習破壊的であるという点であった。ケインが批判するとおり、そこには中央カナダ以外の作家、女性、極端な民族的マイノリティなどは含まれていない。編集者の作家の選択は、当時のアナンシのもつ「カナダ」観の限界、さらに同出版社の活動の原動力であり、それが同時に牽引もした中央カナダの中産階級英語系白人男性が主導した連邦結成100周年記念期のカナダ・ナショナリズムの限界を提示するのではないか。<sup>(28)</sup> プロジェクトの中心となり、同時期にカナダのアメリカ化のを嘆く『ある国家への挽歌』(*Lament for a Nation*) が話題を集めた、ジョージ・グラント (George Grant) の次作をアナンシより出版するリーは、<sup>(29)</sup> 当時カナダ支配者層をしめた中央カナダのレッド・トーリー (Red Tory) として知られる。<sup>(30)</sup>

## 2. ハウス・オブ・アナンシ・プレスと若き社会活動家たちの接点

アナンシ編集者がカナダ文芸ナショナリズム運動に関与すると同時に、同世代の若い作家に注目する体質を持つことは既に明らかにされた。加えて、同出版社が当時トロントの若者対抗文化の中心、ヨークヴィル (Yorkville) に隣接するスパディナ通りに位置したことからも、同社の活動が1960年代の若者主導の対抗文化、社会活動主義、またはそれが象徴するもの延長線上にあった可能性は大きい。当時アナンシは、スパディナ通りをトロントのヒッピーの生活をサポートしていたディガー (Digger) の共同生活施設や、平

和的行動のための学生組合（Student Union for Peace Action、通称SUPA）の事務所と共有していた。ケインは「カナダ・アイデンティティを探求し、社会変革への力として行動すること」をアナンシの特徴と論じる。<sup>(31)</sup> 同出版社の活動が文学や出版に留まらずに社会変革に向かうことは、1967年の『カナディアン・フォーラム』に掲載されたインタビューにおいて、ゴッドフリーが資金があれば実行したい事業として、スパイダーラインとともに社会的行動シリーズ（Social Action Series）の刊行を挙げていること、<sup>(32)</sup> そしてリーが「作家と読者が共に作り出すダイナミズム」を求めると同時に、<sup>(33)</sup> 『トロント・テレグラム』紙上で「我々は人は個人的な存在であると同時に公的な存在であり、現在形成されつつある社会を常に意識すべきであると認識している」と語っていることにもあらわれる。<sup>(34)</sup> こうした編集者の思いは、アナンシのトロント・アンタイ・ドラフト・プログラム（Toronto Anti-Draft Programme、通称TADP）とロッチデイル・カレッジ（Rochdale College）、という二つの若者主導の社会運動への関与としてあらわれる。

#### ①トロント・アンタイ・ドラフト・プログラム

ゴッドフリーとリーが共に反帝国主義思想を持っていた事は前述のとおりである。二人はアメリカのカナダに対する文化的侵略と同時に、ベトナム戦争というアメリカの帝国主義的行動に強い関心を寄せていた。歴史家J. L. グラナツテイン（J. L. Granatstein）が述べるとおり、戦況が悪化するにつれカナダ国民のアメリカのベトナム戦介入への批判は高まり、<sup>(35)</sup> ベトナム戦争批判と反米感情は、カナダ主義を背景に相互にその感情を補強しあった。<sup>(36)</sup> 1964年から65年にかけて戦況が悪化し、戦争要員補給のための徴兵人数が拡大されると、徴兵を避けるためにアメリカ合衆国からカナダに移民する若者、通称「軍国主義難民」（Refugees from Militarism）が増加する。1965年から1974年までにカナダに移民したアメリカ人約175,000人のうち、徴兵回避のためにカナダに移民したと思われる年齢層の者は、50,000人から125,000人と推測される。<sup>(37)</sup> またこの時カナダ史上はじめて、合衆国からカナダへの移民者の数がカナダから合衆国への移民者の数を越えた。

歴史家のロバート・ボーズウェル（Robert Bothwell）は、多くの若きアメリカ人にとって、カナダとの出会いがアメリカ合衆国政府からの手紙ではじまったとその状況を皮肉る。<sup>(38)</sup> 徴兵を逃れる者のみならず、多くの逃亡兵がカナダに潜伏したとされるが、彼らはカーター政権の恩赦（1977）までアメリカへ帰国する事は許されなかった。しかし、彼らの多くは配偶者やガールフレンドとともにカナダに移住していたため、国境を自由に越えられるパートナーを介して、アメリカに残された仲間、家族らと連絡を取った。<sup>(39)</sup> このように徴兵隠避者、逃亡兵が母国との関係を保つ上で、女性が大きな役割を果たした事は注目されるべき事実である。<sup>(40)</sup>

当時のカナダ人的資源・移民省副大臣（Deputy Minister of Manpower and Immigration）は、アメリカからの若者は移民としての基準を満たす限り、カナダへの入国を妨げられるべきではないという見解を公にしている。<sup>(41)</sup> 若く高学歴のアメリカ人移民者は、当時カナダが得ることのできる移民のうち最高レベルであった。彼らを労働力として獲得することを目指すかのように、1967年、カナダの移民法（Immigration Act）は、学歴や、職業的背景、言語的背景などを点数化し移民審査をするポイント制に変わる。徴兵隠避者の多くは、大学教育を受けた中産階級出身者であった。またさらに若い逃亡兵の多くは、コミュニティ・カレッジ・レベルの教育を受けていた。合衆国からの中産階級アメリカ人のカナダへの大量流入は、アメリカ独立に反対してカナダに移民した王党派の流入以来であった。<sup>(42)</sup>

当時アナンシ近隣に事務所を構えたSUPAトロント支部は、ベトナム反戦運動に深く関与していた。彼らは1967年夏にトロントのアメリカ領事館で反戦ピケを行なうが、さらにカナダに関する知識・人脈を持たずに、カナダに移民する合衆国の若者たちを支援するトロント・アンタイ・ドラフト・プログラムを立ち上げる。当時ゴッドフリーがこのプログラムに協力していた事は、マクスキミングなどの著作に明らかである。<sup>(43)</sup> 同様にデニス・リー夫妻は異国における孤独な隠避生活をおくる徴兵隠避者のカウンセリングを行っていたという。<sup>(44)</sup> このような編集者が運営するアナンシは、1968年春TADPと連名で、後にアメリカに帰国し1970年代のニュー・エイジ・ブームを巻き起こす徴兵隠避者マーク・サティン（Mark Satin）を表向きの編者とし、合衆国からカナダへの脱出ガイド『徴兵対象年齢層カナダ移民者のためのマニュアル』（*Manual for Draft-Age Immigrants to Canada*）を出版する。テキサス州出身のサティンは、アメリカを改革すべくイリノイ大学で都市計画を学ぶが問題の根深さを痛感し退学した。1967年1月、サティンはガールフレンド経由でSUPAトロント支部の冊子「自由からの逃避」（*Escape from Freedom*）に触れカナダへ出国する。マニュアル出版当時サティンはTADPのディレクターであった。マニュアルは、1969年の夏までの約一年間で50,000部以上を売り上げ、アナンシのベストセラーとなった。<sup>(45)</sup>

同マニュアルは、具体的な移民申請の方法を事細かに説明する第一部と、アメリカ人のためにカナダの社会・文化を解説する第二部からなる。序章にはTADPを頼りカナダに移住した者からの手紙と、かつて「地下鉄道」（underground train）経由で合衆国南部の奴隷州からカナダへと逃れた者からの手紙を併記しており、編集者が自らのグループの活動を二国間に既に存在するアメリカ独立戦争に反対する王党派以来の政治的カナダ移民の伝統に位置づけようとしていることがわかる。<sup>(46)</sup> この傾向は、当時トロント大学准教授であったエリオット・ローズ（Elliot Rose）の手になるカナダにおける徴兵反対の歴史の解説、第37章「あなたが初めてではない」（"You're not the First"）により強調され



る。<sup>(47)</sup> また、このマニュアルを「正統」に仕上げ皮肉さを増すために、実際に編集を担当したゴッドフリーは、クイーンズ・プリンター (Queen's Printer) が出版するカナダ政府出版物を意識し、故意に粗末に編集し無愛想なタイプセットやレイアウトを用いた。<sup>(48)</sup>

二人の政治・社会的活動主義は、文学・出版業界のナショナリストのみならず、アメリカを逃れた若者をもアナンシに引き寄せた。従って同出版社の経営に関与したものに、アメリカからベトナム戦争を逃れてやってきたものは少なくない。特に、1968年アメリカ合衆国の「共和主義的残酷さと、文化に対する憎しみ」から逃れ、<sup>(49)</sup> 家族の中で「最後のアメリカ人、最初のカナダ人」になるために移民したフェザーリングは、<sup>(50)</sup> ニュー・ヨーク州内からリーと接触し、トロントにたどり着くと数週間後にはアナンシに住み込み、最初のフルタイム社員となった。また、後に同プレスを買収するアン・ウォール (Ann Wall) は、同年徴兵される可能性のあった夫のバイロン (Byron Wall) とともにカナダに移住し、アナンシのヴォランティア・スタッフとなった。さらには、リーのトロント大学時代の旧友で、同プレスから詩集『サークル・ゲーム』(Circle Game) を再版していたマーガレット・アトウッド (Margaret Atwood) も、のちにアメリカ人の夫ジェームス・ポーク (James Polk) とカナダに戻り、ポークとともにアナンシの編集に関与する。加えて前述のスパイダーラインにて小説『食い尽くす』(Eating Out) を出版したジョン・サンドマン (John Sandman) は徴兵隠避者であった可能性が高い。<sup>(51)</sup>

このようにドラフト・ドッジャーを援助した上、米国人作家が国外で出版した書籍を1500部以上輸入することを禁ずるアメリカの保護主義貿易に挑戦すべく、ピート詩人にして当時はヒッピー運動指導者であったアレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg) の詩集『エアブレイン・ドリームス』(Airplane Dreams) をカナダで出版しアメリカへ違法に輸出したアナンシが、その左翼的政治性からアメリカ連邦捜査局 (FBI)、およびそのカナダ国内における調査活動を支援していた王立カナダ騎馬警察隊 (Royal Canadian Mounted Police) の諜報活動および捜査の対象となった事は想像に難くない。<sup>(52)</sup> 問題の詩集の出版を主導した、フェザーリングはアナンシの電話が警察組織によって盗聴されていたことを明らかにしている。<sup>(53)</sup>

## ②デニス・リーとロッチデイル・カレッジ

リーがその創設に深く関わった実験的教育・共同生活施設、ロッチデイル・カレッジは、ベトナム戦争を避けカナダに移住したアメリカの若者のトロントにおける受け皿となった。アメリカからトロントに移住したウォールは同施設に居住しており、そこで当時カレッジの「リソース・ピープル」(resource people) と呼ばれる「教員」であったリーに出会った。<sup>(54)</sup> このように、ゴッドフリーが積極的にベトナム戦争反戦運動に関与した一方、リーはパークレー発の学生運動に参加しトロントで大学改革に熱意を注いでいた。<sup>(55)</sup> 巨大な

トロント大学の非人間的、官僚主義的環境で、人文主義教育を実践することの難しさを感じたリーは、その思いを当時ヨーク大学で哲学を教えていたハワード・エーデルマン (Howard Adelman) との共編になる『ユニヴァーシティ・ゲーム』(*The University Game*) に表し、トロント大学のキャンパスの一角に、同大学イニス・カレッジ (Innis College) と提携するフリー・スクール、ロッチデイル・カレッジを創設した。<sup>(56)</sup> リーが同カレッジの理念を述べた論文「ロッチデイルへ」("Getting to Rochdale") を含む同書は、ゴッドフリーが編集した『徴兵対象年齢層カナダ移民者のためのマニュアル』とともに、アナンシの初期のベストセラーとなった。<sup>(57)</sup>

1968年に大学生協 (Campus Co-op) が運営するヒューロン通り (Huron Street) の6軒の学生住宅から始まったロッチデイル・プロジェクトは、カナダ連邦政府の補助を受け18階建てのカレッジ兼居住施設へと進化し、当時北米に300近くあったとされる伝統的な大学の構成 (学部、コース、カリキュラム、講義、セミナー、教員、成績評価) を持たずに、学生の民主的かつ自主的な学習を重視するフリー・スクールのうち最大のものとなった。また、ロッチデイルの学生は学習のために、様々なトロントの文化・芸術団体と交流したが、アナンシはコーチ・ハウス・プレスや地元の劇団などとともにそれに協力した。このカレッジが創設されると、トロント・カウンターカルチャーの中心はヨークヴィルから同施設へと移動した。

しかし、教育機関としてのカレッジの運営はリーが予想したようには進まず、リーが手本としたアメリカ西海岸の若者対抗文化運動が、ヘイト・アシュベリー (Haight-Ashbury) のサマー・オブ・ラブ (Summer of Love, 1967年) を頂点に、退廃的なドラッグ・カルチャーへと崩壊したように、ロッチデイルにおいてもドラッグ、暴力などが蔓延し、施設は1975年に閉鎖される。カナダ国営放送 (CBC) は、既に同カレッジを1969年1月に「北米最大のドラッグ供給問屋」と呼んでいた。<sup>(58)</sup>

1969年春、ロッチデイル・カレッジに幻滅したリーはプロジェクトから退き、カナダ国内の若手作家の小説の編集とその受け皿となるカナダ文学の体系化に専念する。その結果、リーは前述のスパイダーラインをアナンシにもたらし、1970年のノースロップ・フライ (Northrop Frye) によるカナダ文学評論集『ブッシュ・ガーデン』(*The Bush Garden*)、そして1972年のアトウッドによるカナダ文学入門書『サバイバル』(*Survival*) の出版へと続くカナダ文学テーマ批評全盛期を作り出す。<sup>(59)</sup> また、1969年夏ゴッドフリーはよりカナダ的な出版活動を目指しアナンシを去り、マクスキミング、ジェームス・バック (James Bacque) とともに、ニュー・プレスを同じ建物の中に設立した。1970年には二社共同でトロントで当時渋滞緩和のために計画されたダウントウンを貫くスパディナ・エクスプレスウェイの建設に抗議する『バッド・トリップ』(*The Bad Trip*) を出版するなど、彼らはその活動の中心をさらに自らが生活するトロント、カナダへと向けてゆ

く。<sup>(60)</sup>

ゴッドフリーが新しい出版社に移ると、設立当初反米主義的カナダ主義をモットーとしたアナンシの編集の中心は、リー、そしてアメリカを逃れカナダに移民した二人のアメリカ人、アン・ウォールとジェームス・ポークを含むチームに移る。アメリカからのカナダ文化の独立を目指した出版社が、アメリカとの戦いの中でカナダに迎え入れたアメリカ人たちにその編集の中心、さらには経営権を譲る展開は興味深い。1970年、アン・ウォールは経営難に陥ったプレスの株を購入し筆頭株主となる。ゴッドフリーは直接アメリカ人に株を売却することを拒み、株はリー経由でウォールの手に渡る。この時アナンシは「アナンシの目標の一つは、将来的に我々自身のものとなる国を形成する手助けをすることである。アンとパイロン・ウォールは、このゴールにむけて、カナダ生まれのカナダ人と共に、取り組んでいる」という声明を発表する<sup>(61)</sup>。フライ、アトウッドの著作を出版しカナダ文学の体系化を進め、同時にその運動の中で、自らが出版したカナダ産の書籍を売ることにより会社の経営を安定させ、1976年にフランク・デイヴィ (Frank Davey) の論文「サヴァイヴィング・ザ・パラフレイズ」("Surviving the Paraphrase") の出版よりはじまるバックラッシュまで、カナダ文芸ナショナリズムをサポートし続けたのは、このアメリカ人を含むチームであった。<sup>(62)</sup>

ハウス・オブ・アナンシ・プレスはその後、1989年にストッダート・プレス (Stoddart Press)、2002年にスコット・グリフィン (Scott Griffin) に買収され現在に至る。創設期のメンバーの多くを失ったその出版方針に明確な個性はない。

#### おわりに—結論に代えて—

本稿は、1960年代後半のカナダ文芸ナショナリズムの一翼を担ったハウス・オブ・アナンシ・プレスの活動を中心として、1950年代に始まるカナダ文芸ナショナリズムが、カナダ独自の文化の発達を阻害するとして攻撃したアメリカ文化との関係の中で形成される様子に着目した。

1960年代後半に入り、当時20代であった若者たちが、カナダ文芸ナショナリズムを牽引するようになった。彼らは1950年代のマッシー報告書同様、アメリカ文化のカナダ国内への文化帝国主義的拡張を懸念した。しかし、彼らのカナダ文芸ナショナリズム運動がその反米主義的な発言とは裏腹に、ベトナム戦争反戦運動、学生運動、対抗文化運動など、アメリカ合衆国における同年代の若者の活動と連動していたことは明らかである。ここに、アメリカ文化を借りずには、自国の文化の確認すらできないと、カナダ文芸ナショナリズムを批判することもできるのかもしれない。しかし、筆者はあえて彼らの行動の中にカナダ文芸ナショナリズムのカナダ性を読み取りたい。米加国境を跨いだ若者主導の運動が共有したものは、かつてピアソンがカナダの政治家として示した小さな国を抑圧する帝国主

義的権力への抵抗であったのではないだろうか。このように考えることにより、カナダ文芸ナショナリズムがカナダ的であったからこそ、当時のアメリカ社会へ抵抗した者たちと連動したと論じることが可能になるのではないか。この文脈において、カナダ文芸ナショナリズムの1970年代中期まで続く発展が、カナダ人と同様に、自ら選択しアメリカ合衆国からカナダへと移住したアメリカ人たちの貢献なしには難しかった点は、カナダ文学史上さらに強調されても良いと思われる。

## 註

\*本文中の外国語は確立された邦訳がない場合、筆者の手で日本語訳を行い、必要と思われる際には原語を追加表記した。

- (1) 歴史家メアリー・ベス・ノートン (Mary Beth Norton) によれば、ケネディは「冷戦をより大胆に力強く遂行していくこと」を目指す冷戦主義者であった。この註の引用は、本田創造監修、上杉忍他の訳による、メアリ・ベス・ノートン著『アメリカの歴史⑥冷戦体制から21世紀へ』(三省堂、1996)、48-49頁より。
- (2) ディフェンベーカーは、アメリカがあたかもカナダを手下のように扱っていると述べ、アメリカが主導するNATO配備のカナダ軍に核装備をさせることを躊躇し、1962年交渉の拗れから駐米大使を召還した。また、彼は後に自国に忠誠を誓えない国民はカナダに必要なとし、カナダへのアメリカ人ベトナム戦争徴兵隠避者の受け入れを批判する一方で、王立カナダ騎馬警察隊 (RCMP) が、カナダに潜伏するアメリカ人徴兵隠避者の捜索に関してアメリカのFBIに協力していることを批判するなど、あまり理性的ではない反米主義を展開する。木村和男編『カナダ史』(山川出版社、1999)、313-14; J.L.Granatstein, *Yankee Go Home?: Canadians and Anti-Americanism* (Toronto: HarperCollins, 1996), 184-85.
- (3) 木村、309。
- (4) ピアソンの国連声明 (1956) は、以下の文献に引用されたものを筆者が和訳し使用した。Harriet Friedmann, "The Forgotten Alternatives," *Peace Magazine* (March-April 1991): 12.
- (5) 筆者訳。Peter Stursburg, *Lester Pearson and the American Dilemma: Vietnam War: The Speech* (New York: Doubleday, 1980), 217.
- (6) カナダ連邦結成100周年記念については、Pierre Berton, *1967: Last Good Year* (Toronto: Doubleday, 1996) を参照のこと。
- (7) 本章におけるマッシー報告書に関する情報の出典は、Albert A Shea, *Culture in Canada; a Study of the Findings of the Royal Commission on National Development in the Arts, Letters and Sciences, 1949-1951* (Toronto: Core 1952) である。
- (9) 第二次世界大戦後のカナダ英語文学キャノナイゼーションに関しては、Robert Lecker, *Making it Real: the Canonization of English-Canadian Literature* (Toronto: Anansi, 1995) が詳しい。
- (10) 19世紀半ば以降のカナダ文学の教育現場での取り扱いについては、*Canadian Encyclopedia* (ウェブ版) に掲載されているR. L. McDougallによる "Literature in English: Teaching," accessed

Dec. 31 2006; available from <http://www.thecanadianencyclopedia.com/index.cfm?PgNm=TCE&Params=A1ARTA0004710>に詳しい。

- (11) John C. Ball and Jennifer Andrews, "Introduction: Beyond the Margins," *Studies in Canadian Literature* 25, no. 1 (2000) : 2.
- (12) George Woodcock, "Publishing in Canada: a Symposium," *Canadian Literature* 33 (1967) : 3-62. このシンポジウムの12頁より、バーニーの発言を引用した。
- (13) George Woodcock, *Canadian Literature* 57 (1973) : 3.
- (14) 当初2500ドルであった元手を増資するため、ゴッドフリーは1967年に当時カナダ・カウンシルのディレクターであったピーター・ドゥヤー (Peter Dwyer) 主催のカナダ文学の販路拡大の方法を議論する会議に出席した。その後しばらくして彼はカナダ・カウンシルの文化芸術担当係官、デイヴィッド・シルコックス (David Silcox) に予算申請を行なうが、その予算申請書類には不備があったため、シルコックスの協力のもと申請書を書き直し再提出し、ついに小規模出版社としてはじめて、カナダ・カウンシルの財政補助を受けるに至った。Roy MacSkimming, *Making Literary History* (Toronto: Anansi, 1997) を参考にしたが、本稿の執筆に当たっては原典が入手できなかったため、アナンシの公式ウェブサイトに掲載された、ウェブ版の社史を利用した。Accessed 31 Dec. 2006; available from [http://www.anansi.ca/history.cfm?about\\_id=1](http://www.anansi.ca/history.cfm?about_id=1).
- (15) William Toye, ed., *The Concise Oxford Companion to Canadian Literature* (Don Mills: Oxford, 2001) , 17. 同書は現代カナダ文学史上、アナンシを「67年の万博以後のカナダにおける文芸アイデンティティを形成する上で、重要な役割をはたした」と位置づける。また、同プレスで働いていた、ダグラス・フェザーリングは、その60年代回想記、*Travels by Night*において、同プレスが「形成を助け、それに声を与えた」カナダ文学運動の最前線にあったとしている。Douglas Fetherling, *Travels by Night: A Memoir of the Sixties* (Toronto: Lester, 1994), 108.
- (16) MacSkimming, par 5.
- (17) "Small Press: An Interview," *Canadian Forum* 47, Aug. 1967, 107.
- (18) MacSkimming, par. 8.
- (19) Dennis Lee, *Kingdom of Absence* (Toronto: Anansi, 1967).
- (20) Ibid., par 14.
- (21) Stephen Cain, "Tracing the Web: House of Anansi's Spiderline Editions," *Studies in Canadian Literature* 25, no.1 (2000) : 112.
- (22) "Small Press," 107.
- (23) Marq deVillers, "The Underground Press," *Toronto Telegram*, 7 Dec. 1968, 1.
- (24) Fetherling, 109.
- (25) John Richmond, "Anansi's First Brood of Novelists," *Montreal Star*, 27 Sept. 1969, 7.
- (26) Dave Godfrey, *Death Goes Better with Coca-Cola* (Toronto: Anansi, 1967).
- (27) Alden Nowlan, Rev. of *Death Goes Better With Coca-Cola*, by Dave Godfrey. *Canadian Forum*, March 1968, 282.
- (28) Cain, 117.
- (29) George Parkin Grant, *Lament for a Nation: the Defeat of Canadian Nationalism* (Toronto: McClelland and Stewart, 1965); *Technology and Empire: Perspectives on North America* (Toronto: Anansi, 1969).

- (30) レッド・トーリーとは、カナダ特有の「保守的」社会主義者を指す。カナダの社会主義思想は、18世紀にアメリカ合衆国の個人主義を否定し、全体の福祉をもとめてカナダへと移住し、その社会的支配者層を形成した「保守派」のロイヤリスト（王党派）に起源を持つために、レッド・トーリーという一見矛盾する二語からなるこの用語が生まれた。グラントおよびリーがレッド・トーリーであることは、フェザーリングやグラナツテインがその著書で指摘している。
- (31) Cain, 113.
- (32) "Small Press," 107.
- (33) スパイダーラインの書籍全ての表紙内側にある宣伝文句を引用した。
- (34) deVillers, 1.
- (35) 当初ヴェトナム戦争へのアメリカ合衆国の介入に関するカナダ国内の世論は、賛否が拮抗しており、1968年まで反対派が4割を超えることが無かった。しかし、1968年には戦争反対者が、戦争賛成者を上回り、1972年2月末の段階で、ついに過半数51%がアメリカの戦争が間違いであったと回答するに至った。Granatsteinの著作、174頁を参照のこと。
- (36) Granatstein, 177.
- (37) Ibid., 182.
- (38) Bothwell qtd. in Granatstein, 182.
- (39) Granatstein, 182.
- (40) 本稿9-10頁に記したマーガレット・アトウッド、アン・ウォールの活動を参照のこと。
- (41) Granatstein, 184.
- (42) Ibid., 184. このカナダへの徴兵隠避者の大量流入は、1972年に移民申請書類のカナダ移民局または在米カナダ領事館への郵送化、約半年の審査期間の導入など、移民審査が複雑化するまで続いた。
- (43) MacSkimming, par. 19.
- (44) Fetherling, 138.
- (45) MacSkimming, par. 42.
- (46) Satin, viii.
- (47) Ibid., 76-77.
- (48) Fetherling, 138.
- (49) Ibid., 113.
- (50) Ibid., 102.
- (51) Cain, 118. Margaret Atwood, *Circle Game* (Toronto: Anansi, 1967); John Sandman, *Eating Out* (Toronto: Anansi, 1969).
- (52) Allen Ginsberg, *Airplane Dreams: Compositions from Journals* (Toronto: Anansi, 1968).
- (53) Fetherling, 138.
- (54) MacSkimming, par 22.
- (55) Fetherling, 131.
- (56) Howard Adelman and Dennis Lee, eds., *The University Game: Critical Essays on Traditional Academia* (Toronto: Anansi, 1968).
- (57) Ibid, 132.
- (58) "Rochdale College: Organized Anarchy," with Peter Meggs, *Concern*, CBC Radio, Toronto, 8 Jan. 1969. なお、ロッチデイル・カレッジについては、フェザーリングおよびバートンの著作

に詳しい。

- (59) Margaret Atwood, *Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature* (Toronto: Anansi, 1972) ; Northrop Frye, *The Bush Garden: Essays on Canadian Imagination* (Toronto: Anansi, 1971).
- (60) David M. Nowlan, *Bad Trip: the Untold Story of the Spadina Expressway* (Toronto: new and Anansi, 1970).
- (61) マクスキミングの社史、第54段落に引用されたプレス・リリースを引用した。
- (62) Frank Davey, "Surviving the Paraphrase," *Canadian Literature* 70 (1976) : 5-13.